

特集

子どもへの学習支援

子どもたちは今!

ボランティア日本語教室で



近年、都内各地のボランティア日本語教室に子どもの姿が目立ってきています。同じ町に住む日本語等に不自由している人たちを、隣人として支援していこうと活動している団体の中には、子どもたちの対応に頭を悩ませているところも少なくありません。一方、子どもたちの窮状を見兼ね、敢えて子どもたちを支援の対象として研究、活動をしている団体も少しずつ増えています。



がんばろう!

ボランティア日本語教室に来ている子どもたちに、今年の抱負などを書いてもらいました。「日本語の勉強がんばります!」と書いた成厚君(韓国12才)、豪介君(中国10才)、行超君(中国12才)、「日本語が上手になりたい。」と小百合さん(中国12才)、「さんずうがんばります。」とダイアンちゃん(フィリピン7才)、「卓球が上手になりたい。」とミラド君(イラン11才)、「成績をよくしたい。バスケでブロック優勝したい。」と書いた佳君(中国14才)は、最後に「中国へ帰って遊びたい。」と本音が出ました。「数学や英語などいろいろ頑張ります。」と書いた佳薇さん(中国14才)は高校受験を目指していますが、「ことしは私は母と父とみんなで元気でいたいです。」と家族を大切に思う優しい子です。



日本の友だちと

優佳さん(中国14才)は長い作文を書いてくれました。

私が中国から日本に来たのは5月でした。日本の春はとても暖かいし、いろいろな花が咲いていて、とても美しい国だと思いました。最初、日本語も分からなくて習慣も違いますので非常に困りました。(中略)日本の学校へ来たときは、すごく緊張していましたが、クラスメートはとても親切に声をかけてくれて、少し緊張がとけました。(中略)日本人は優しいですね!

私が来たばかりのころは、学校はいつ終わるか分からなかったもので、それで友達に「いつ下校(げこう)しますか。」と聞きました。でも私の日本語の発音はあまり標準じゃなかったもので、友達は「いつ結婚(けっこん)しますか。」と聞こえてしまいました。(中略)逆に私に「いつ結婚したいですか。」と聞いてきました。あの時、私は本当に泣くに泣けず、笑うに笑えず、あとすぐに「下校」と紙に書いて、友達に見せると二人は大きい声で笑いました。(中略)これからも元気よく毎日笑顔で過ごしたいと思います。

優佳さんは、よい友だちに恵まれて、楽しい学校生活をおくっているようです。



みんな世界の子ども

また、采玲さん(台湾12才)は、日本にも日本語にもかなり慣れていることが、その作文からわかります。

私は、前から動物がげつめつしていることを調べていたら、人間が使っている物が動物を苦しめていることが分かってきました。

日本は、お金や物という面から見れば、世界で最も豊かな国です。けれど、人間がいろいろな物を作るため、自然の木を切ったり焼いたりして動物の住みやすい環境をこわしている、ということが分かります。また美しい皮や角をとるため、たくさんの動物が殺されています。もし、このままの環境であるとしたら、私は、世界がほろんでしまうんじゃないかと思います。私は自然と動物が大好きなので、その自然や動物がなくならないように物をもっと大切に使い、動物も大切にしていきたいと考えています。これについて私は肉や野菜などを食べている時に残さずに食べています。もったいないことをすると自然に対して悪い気持ちになります。みんなも残さずに食べましょう。自然の物を使って作っている品物も大切にしていきたいものです。

(子どもたちの文は原文のまま)

多文化共生社会の姿

多文化共生社会の共通語は日本語

新大久保語学院 李 承珉



私は去年6月から「新宿区民会議」に参加している。「新宿区民会議」とは新宿の基本構想や基本計画、マスタープランなどを住民側が検討し区長に提案するために、一般区民から公募した約300余名からなる会議である。私は第6分科会で「多文化共生」や「コミュニティ」、「自治制度」などについて検討している。その中でも、最も時間をかけながら争論になったテーマは「多文化共生」だ。

新宿区は住民の約1割が外国人で、10年後の新宿は外国人が今より多くなる国際化したまちになると想定して議論を進めている。特に私が属する第6分科会では外国人住民に対する議論が活発で、外国人を警戒する立場の方もいれば、外国人と親密感を持ちより暖かい目線で外国人を迎える姿勢を持つ方など、様々な観点から議論が行われた。議論が活発になるにつれ、議論する住民は外国人に対する視線を警戒から協動的に、より前向きにとらえることを感じるようになった。

少子化にも拍車がかかり日本にはますます外国人が増え、もはや日本社会も多民族・多文化の多様な価値観を受け入れなければならない時代の流れに、新宿区はその先頭に立っているように認識する住民も始まった。いつのまにか、議論は「多文化共生社会」に向けての区の政策は必然的なものになっていた。新宿の国際化モデルが成功すれば将来は日本全国に広がる規範となりそうになっていた。その中、外国人住民である私は何か分からない不安を感じるようになった。その「多文化共生社会」に対してである。

去年イギリスでのテロ事件、フランスでの暴動事件が浮かんだのだった。多文化共生社会を志向してきた

ヨーロッパではその理念を揺るがす異文化人による事件が起こった。事件の原因が単なる多文化社会だったからとは思わないし、社会の構造的な問題があるだろう。だが、多文化共生社会が「異なる文化を守り続ける単なる多文化の集合社会」であれば、いつでも異なる文化の葛藤や衝突が起こりうるのではないか。多文化共生社会の姿についてより真剣に考えてみたのだ。

私の場合、外国人住民として自分や子供を日本社会に同化、あるいは融合される日本人化にはしたくない。韓国人としてのアイデンティティと韓国語を持ちながら韓国の文化を忘れず、むしろ韓国文化を日本人に紹介することが、日本人や日本文化をより豊かにすることだと信じている。問題は日本人と日本文化とのコミュニケーションである。異なる文化の共存する社会が、コミュニケーションがなく独自に文化を守り続けることは「危険な共存」になりかねない。多文化共生社会の成敗は多文化間コミュニケーションにかかっているのではないだろうか。多文化間コミュニケーションとは異文化VS日本文化だけではない。異文化VS異文化でも大事である。たとえば、問題は韓国人と中国人の間でも起こり得る。したがって、多文化間コミュニケーションのために、共通語である日本語をきちんと覚えさせることや多文化間ネットワークの形成と交流、ひいては協力事業を増えさせることが肝心であると思われる。

成功する「多文化共生社会」は日本文化を主たる文化とし、異なる文化がそれに合わせて共生しながら、お互いに絶えずコミュニケーションをしていく。そして多文化は協調と協力をしながら日本社会の発展に貢献していく。新宿の区民会議ではそのような多文化社会を夢見ながら、議論を続けるつもりである。

インド人との 日本語学習を通して

日本語学習市場 (Language Bazaar)
野田 淳子



日本語を学習するインド人と接して、感じる、日本文化との違い・特徴は、大きく3つ有ると思います、【言語】【宗教】【生活習慣】です。

言語について

インドは、日本の約9倍の国土を有し、多民族国家のため、憲法で公認されている18の言語（主要言語）と844の方言が有ると言われ、ヒンディ語を公用語として、英語を準公用語としています。

5～6人のグループで日本語を学習すると、異なる2～3位言語の人がいて、一つの単語を理解する時に自分の言語で考え、互いに英語で説明し合い理解する事が良くあります。

また、聴いてすぐ覚え、すぐ応用する能力が有ると思います。その反面、文字を書くことが苦手で、ヒンディ文字と日本の文字では書き順が違うので、どこから書くのか見当がつかない状態です。日本語の左から右、上から下の書き順を身に付けないと、カタカナのツとシ・ソとン・ワ・クなど読んで書くとき区別がつかない人が多いです。アクセントは何回も注意することなく、すぐにリピート出来ます。

宗教について

信仰が厚く、学習する上でも多少影響することがあります。「あなたの神様・宗教は何？」と良く聞かれます。その背景には宗教と食物との深い関係が左右しており、ノンベジタリアンとベジタリアンに分かれ、ベジタリアンの中でも、根菜類を食べない人がいます。その人たちは、キノコ類・蜂蜜も食べないなど複雑な宗教上の教えを守って生活しているので、日本の食文化は理解しにくい様です。

教科書に良く出てくる生姜焼き、親子丼、すき焼きなど、あまり興味を示さない。食堂での注文の会話練習も、あまり必要と感ぜない人もいます。ベジタリアンの中には、カタカナの単語、ゼリー・

プリン・ハム・ベーコンなども分からない人が多いです。食品成分を見るために、まず覚えたい漢字は、玉子・卵・牛肉・豚肉・魚・酒などで、書けなくても読める様、真剣な表情で書き留めています。

断食期間中は、何となく元気も無く、テンションも低いように感じます。食べ物などの単語や話題は遠慮しています。

生活習慣について

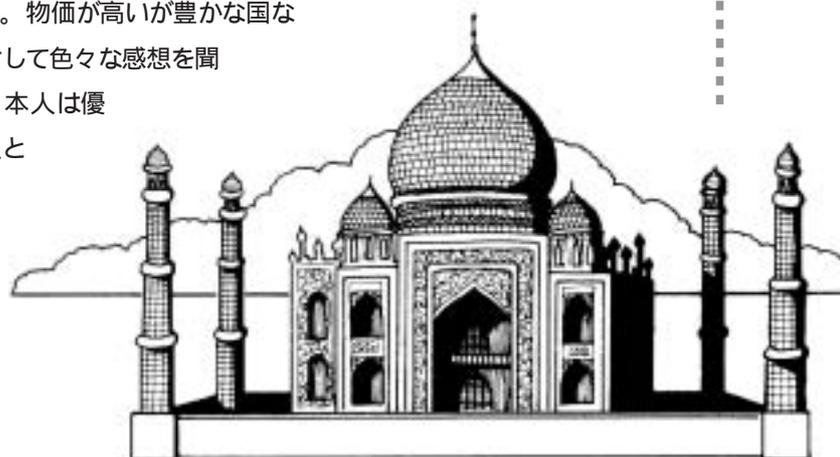
インドでは二世世代・三世代の大家族で暮らし、食事も全員で賑やかにします。在日のインド人も家族の誕生日・宗教行事など、家族単位で大勢集まっては食事をします。

パーティが大好きな人たちです。また、クリケットも好きで、国民的なスポーツです。試合のある日は集まってインドからの衛星放送で夜中まで観戦しています。生活は夜型で、朝は入浴から始まります。ティータイムは6時で、9時から10時が全員揃っての夕食時間で、日本とは随分違った生活です。

インドでは一般的にメイドを使い、仕事別に住み込みのメイド以外に通いのメイドを数人使います。インドの女性は、日本の主婦の家事に驚き、日本の暮らしは疲れて大変だと言います。こんなところにも五千年の歴史・文化・社会の違いを深く感じます。

インド人は日本に対し、大変親日的で友好的です。成田空港に着き、動く歩道に、タクシーの自動ドアに驚き、住まいは天井が低く狭い、街は清潔で安全、人が溢れている。物価が高いが豊かな国など、日本に対して色々な感想を聞

きますが、日本人は優しく親切な人と言うのは、皆同じに感じていると思います。





特集

子どもへの学習支援

外国籍児童・生徒への日本語支援

東村山地球市民クラブ 川村 弘史

東村山市で1999年から日本語ボランティアをしています。外国籍の子どもといっても色々なケースがあります。ここでは日本の学校に入学や編入を希望しているが、日本語が全くわからない児童・生徒への日本語支援について日頃の活動の一端を記し私見を述べてみます。

2003年1月、5年生に編入を希望している中国人の児童に対し、市役所国際課から編入前の日本語指導を依頼されました。もちろん無償ボランティアです。指導を始めて約20日後に編入できましたが、日本語のレベルはとても授業についていけない状態ではありませんでした。学校とも相談し、編入後も授業終了後の教室を使い、毎日日本語の勉強を1時間行いました。春休み、夏休みは市役所の一角を借りて毎日続けました。本人もよく努力しましたが、学校の先生や友達にも恵まれ、6年生の秋頃にはほぼ授業にもついていけるようになっていました。

当時、当市には外国籍児童・生徒への日本語支援体制は整っていませんでした。グローバル化の時代、外国籍の住民が多くなり、それに伴い該当児童・生徒も増えることが予想されました。この1年余の経験をとおして感じた諸問題・検討事項をまとめ、外国籍児童・生徒への日本語支援体制についての提案書を市教育委員会へ提出いたしました。2005年、東村山市教育

委員会は「日本語適応指導実施要領」を作成し6月から施行しました。教育委員会 教育部 指導室は学習指導を受け持ち、「日本語適応指導教室」を設置し、東京都嘱託職員をあたらせる。同 学務課は言語指導を受持ち、日本語指導員の選定を行い、児童などが在籍する学校へ派遣し言語指導を行う、となっています。

外国籍児童・生徒の多い自治体の対応に較べれば不十分ではありますが、行政支援の一步が踏み出されたのです。

言葉は知識の習得や、生活上必要なだけでなくその子の人間形成にとっても重要であり、どうしても日本語指導は必要です。しかし日本語支援はボランティアにお任せになっています。学校の先生も授業の内容を理解できない子どもを、ただ座らせておくのは本意でしょう。

最近「行政と市民の協働」がいわれています。私たちボランティアはただもくもくと頑張ればよいというだけでなく、行政を動かさなければなりません。先ず予算ありきでなく、自らが動き実績を示し、その必要性を行政に理解、評価してもらい、結果として予算がつくように働きかけたいものです。

税金の用途について市民が声を出していかなければならない時代でしょう。

外国籍のかたから「外国人を弱者としてのみ扱わないで欲しい。必要なことにはお金を払う覚悟はある。」といわれたことがありました。保護者は「義務教育」でいう教育を受けさせる「義務」を負っているのですから、日本語支援者（有償ボランティア）に対する指導料などは対象児童の保護者も負担し、一部行政が補助するというのではいいのではないのでしょうか。このことはこれからの検討課題です。行政にはその仕組みづくりとそれを動かす予算の確保をしてもらいたいと思うのです。それが「行政と市民の協働」の意味と理解しています。

子どもは将来の担い手であり、無限の可能性を持っています。外国籍の児童生徒もひとしく日本の義務教育を受けることが出来、健全に育つよう行政とも協働して支援していきたいと思っています。





子どもへの学習支援

TAMA日本語共育ネットワーク

木全 恵子 (八王子にほんごの会 / 八王子市)

多摩地域で日本語学習支援に取り組んでいるグループ・団体が、情報交換のために6年前に作ったネットワークです(10市、11団体、個人1)。2カ月に1回のペースで情報交換、話し合い、研修会などを行っています。また年1回は武蔵野市国際交流協会が主催するMIAプラザと共催でシンポジウムなどを実施しています。昨秋は昭和女子大学教授の興相先生のご指導のもとにワークショップをしました。その内容の一部をご紹介します。



テーマ

子どもたちへの日本語支援

課題と解決に向けて

1. 「家庭」の問題点

【親】

- ・生活に追われていて、子どものことを考える余裕がない
- ・生活習慣の違い
- ・日本の教育の内容や教育システムについて知らない
- ・地域の中で孤立している(日本語力の不足、地域の人たちの無理解)

【子ども】

- ・日本語力不足で授業の理解が困難
学習言語と生活言語の違い
- ・子どもが困っている状況を、親に話せない 親への不信感・日本語能力の差
- ・子ども自身が自分の将来像を描けない
- ・アイデンティティの喪失、母語の喪失、文化の喪失

2. 「学校」の問題点

【教師】

- ・教師が日本語のわからない一人の生徒にかかわれない 生徒は無視されていると感じる。子どもの心が見えていない
- ・教師の認識不足 わからないのは個人の問題とみなす。同化の強制

【学校】

- ・日本語力不足で授業がわからないことへの理解不足 学習言語と生活言語の違い
- ・日本の教育の柔軟性不足(わかりやすい授業のための更なる研究が求められる)
- ・外国籍の子どもの受け入れシステムが統一されていない
- ・地域のボランティアの支援を受け入れ、活用することに消極的

3. 「ボランティア」の問題点

- ・日本語ボランティアや地域の人びとが、子どもの問題に対して認識不足。
- ・個人で抱え込んで疲弊する
- ・ボランティア側の研修が必要
- ・年齢差の少ない若いボランティアの不足。子ども向けの日本語教室が少ない
- ・行政と協力体制を作り上げる力が不足

4. 「行政(支援機関)」の問題点

- ・少数の子どもの問題で大きな問題ではないと考え、本気で取り組もうとしない
- ・外国籍の子どもの教育カリキュラ

ムがない(学校によって対応が異なる)

- ・外国人受け入れを全体的に考える担当部署が早急に必要(教育委員会の閉鎖性)

5. 「ネットワーク」の問題点

- ・今までは、かかわっている人たちの間での意見交換が不十分だった

まとめ 問題解決のために

「家庭」「学校」「ボランティア」「行政」の四者が「開かれた、活発な活動にする、対等なネットワーク」を作り上げる必要がある。「家庭」に対しては、地域が地域で生活する親子を支援するネットワークや母国語の使えるネットワークの構築(母語・文化の継承)が求められる。「ボランティア」は一人で抱え込まずにネットワークを活用すること、子どもの教育についての重要性をPRしていくことを心がけたい。「学校」「行政」に対しては、現場の先生のできること、行政のできること、ボランティアのできることを話し合い協力し合うネットワークの構築と、多文化共生を前提とした教員養成、専門家の配置を求めていきたい。



nice to meet you

OCNetの子ども日本語支援について

OCNet

(外国人とともに生きる大田・市民ネットワーク)

豊田合志(大田区)

OCNetは、1992年に設立された在日外国人支援のNGO団体で、東京都大田区を舞台にさまざまな活動を展開しています。私たちの主だった事業には「相談、交流、日本語教室」の3つがありますが、今日はその中でも、比較的最近に始まった子ども日本語支援について紹介させていただきたいと思います。

OCNetの子ども日本語支援は、相談活動の一環として2005年2月からスタートしました。対象は、活動規模の関係から、今のところ小学校中学年から中学生までの児童・生徒としています。

現在、月・水・金・土の昼過ぎの時間帯に教室を開いていて、子どもたちはそれぞれのペースで通ってきています。

この一年間で、中国・フィリピンにつながる子どもを中心に15名程度がここを利用しました。これまでの傾向としては、来日して一年未満の子どものケースがほとんどです。これは、私たちの広報の仕方のせいでもあるのでしょうか。

今後の事業発展のための課題としては、まずは私たちの活動を地域の人にもっと知ってもらふことと、それから、学校現場の先生方が気軽に相談を持ちかけてくれるような関係づくり、が挙げられます。前者に関しては、今年に地

域でのイベントや学校の行事に積極的に参加したり、様々な媒体を通して活動をPRしていこうと考えています。また、後者では、現在抱えている子どものサポートをめぐる先生方との話し合いから、少しずつ信頼関係を築いていけることを期待しています。何事も焦らず、しかし着実に歩みを進めていきたいものです。

詳しくは団体ホームページをご覧ください。(http://www.ocnet.jp)



会員団体紹介

Nice to Meet You

nice to meet you

夜の会として昨年誕生したばかりです

日本語を楽しむ会

福井 芳野(小平市)

「小平ってどこ? 東京?」と何度も聞かれる。ここは東京の西の郊外。

一昨年発足した朝の「小平日本語の会」に続き、夜の会として昨年誕生したばかりです。西武拝島線・国分寺線小川駅近くの小平西町公民館で、水曜日の夜7時から個別指導をしております。雨の日も、風の冷たい夜も、学習



者・スタッフ共 文字通り駆け込んでのスタートです。

この会の特徴は、学習者に近くの大卒の交換教員や留学生、その家族が多いこと、またスタッフには人生のベテランはもとより、大学生や若い社員も加わっていることでしょうか。最近、中学3年だった子が2年に編入となり、「もう1年中学に行ける! スキーの移動教室に行ける!」と大喜び。学校が楽しくて仕方がないといった様子です。毎回模索しながらの指導ですが、殆んど話ができなかった学習者が、どんどん語彙を増やし、難しい話題や研究課題について話せるようになったり、冗談

を言って笑わせるのを見るのはとても嬉しいものです。そして、私たちの方がかえって学習者やその背景について多くのことを学んでいるのに気づかされております。

短い期間ながら学習のほかに、季節の行事を始め ウイグル料理を楽しむ会、工場見学、花火大会、また地域の中学校に招かれ母国についての授業など みんなで楽しみながら進めております。

3月には、朝の会と合同で講習会を持ち、ボランティアで日本語支援をする意味についてあらためて考え、学習しよう計画しております。



ボランティアの声

日本語ぐるりっと 飯島時子

年少者への日本語ボランティア学習支援を考える

せん。ニーズも多様といえるでしょう。

本来、学齢期の子どもに学習する権利を保障することは、「子どもの権利条約」を批准している国が果たすべき義務です。それが十分に

行なわれていない場合、行政に働きかけたり、子どもが地域で受け入れられる「場」を整備したり、学校や保護者をサポートするなど、そこにボランティアとして（しか？）できる（できない？）役割が生じられます。

今後は、「年少者への日本語ボランティア」活動を、「子どもの権利」として日本語学習がきちんと保障されるよう共通認識をもって、「東京という地域」の中で捉えていくことが必要だと思います。

「日本語ぐるりっと」のこれまでの活動も何らかの形でお役に立てれば幸いです。

問合せ：gururitto8@yahoo.co.jp



「日本語ぐるりっと」は、大田区で年少者に日本語学習支援をしているグループです。1998年の結成（母体となる日本語指導の活動はそれ以前から）以来、児童・生徒用の教材の作成・出版（「学校生活 にほんごワークブック」凡人社）や、勉強会、イベント、文部科学省への提言などを行ってきました。

2002年から、月・水・金の午前と午後には区の協力の下で教室を開いています。教室活動と共に、最近では学校への派遣指導にも力を入れ、より充実した支援を目指しています。ちなみに、一連の学習支援モデルも提案しています。

ところで、年少の学習者は小・中学校へ入る子どもばかりではありません。これまで支援した生徒は3歳から18歳まで。実際、日本の義務教育外で日本語習得・学習を必要としている子どもは少なくありま

ボランティアの声

協力会員 中山真理子

中野区国際交流協会の
子供日本語支援

協会が学齢期の子供の日本語支援に本腰を入れてからまだ5年にしかありませんが、できるだけ早い時期に言葉の障害を取り除くお手伝いをしようというのが基本的考え方です。

成人の場合は3クラス:火曜日午前(10:00~12:00)午後(14:00~16:00)木曜日夜(18:30~20:30)のどれかに所属して、週1回の学習と決まっていますが、子供には全クラスが開放されていますから全クラス参加できます。但し、火曜日の午前と午後のクラスは学校の授業のある時間帯ですから、本人と保護者の希望と、校長先生の特別の許可が要ります。

火曜日の午前・午後クラスの後には「子供クラス」(16:00~18:00)があります。ここでは小学低学年の場合は、本人、保護者、学校(校長、担任)が希望すれば、週に3回まで

1回2時間ボランティアを派遣することも出来ます。ですから、できるだけ早く、多くの日本語を学習したい低学年生は最大で週14時間勉強できることになります。

それから、春休み(4~5回、1回3時間)と夏休み(12回、1回3時間)にも特別のクラスがありますから、もし全部出て勉強したら、1年で最高600時間ぐらいになります。(現在、該当者なし)

ここには何時間、何年間までという時間や期間の制限はありませんから、日常会話ができれば終わりと言うようなことは無く、本人が本当に要らなくなるまで何年でも勉強できます。

協会勉強している子供達は見学に来る誰もが吃驚するほど本当に一生懸命に勉強します。多分、1学期毎の小さい目標、2~3年毎の大きい目標を持つからだと思います。



「国際化市民フォーラム in Tokyo」が今年も開かれ、

TNVNは企画・運営に参加

平成18年2月11日(土) 品川区総合区民会館「きゅりあん」で～多文化共生を目指して・国際社会に生きる～をタイトルに6分科会で報告と質疑応答、意見交換が行われました。

特に 『日本語習得を必要とする子どもたちへの教育の現状～保護者、生徒及び学校現場からの報告』、『日本語習得を必要とする子どもたちへ教育支援～デー

タから見る東京都の現状と課題』の2分科会は大盛況で日本語学習支援への関心の高さをヒシと感しました。

『外国人が都民にとって東京の暮らしは～誰もが住みやすいまちづくりに向けて』

[多文化共生のまちづくり～都内自治体の事例を中心に』の2分科会も多文化共生社会へ向けた動きの中で直接外国人からの報告・意見交換が行われ、一方、動き出した各自自治体・国の施策・推進が報告され、多数の質疑応答がされました。

『災害復興と海外協力』『在住外国人のための防災を考える』も欠かせない分科会でした。主催は東京都国際交流委員会、国際交流・協力TOKYO連絡会です。今回のフォーラムでの討議が、是非具体的な行動に踏みだすキッカケとなってほしい。



ニュースレターの記事をお待ちしています

ニュースレターは3ヶ月毎に発行しています。団体・個人にかかわらず、日本語学習支援・日本語ボランティア活動に関する意見・紹介・情報などの記事を是非お寄せ下さい。前号で「男性の活動の場」、本号では「子どもの学習者」に関する記事の特集しました。掲載記事についてのご意見・希望も歓迎します。TNVN NL編集担当宛にお送り下さい。

TNVNスタッフ募集!!

TNVNの事務局スタッフ・ニュースレター編集員となってTNVNスタッフと一緒にボランティアでご協力いただけませんか。TNVN事務局までご一報をお待ちしています。

TNVNへの入会をお待ちしています

詳細はTNVN事務局まで「活動・入会案内」を郵便でご請求下さい。(送料90円切手同封)

Column

最近、大学進学が決まってビル清掃のアルバイトを始めた学生が、仕事仲間の男性(50～60代)に「中国人は雑巾も絞れないのか!中国へ帰れ!」と怒鳴られたと訴えてきた。学生は台湾出身、自分は台湾人という誇りを持っている。又、レポートの課題で、学生が日本人男性(80代)に「透明人間になったら、どうしますか?」と聞いた。その間に「透明人間なんてならん!正々堂々と生きなさい!」と答えたと聞いて、クラスの学生達はすっかり感心していた。

外国人は、来日した途端、背中に彼らの「国」を背負うことになるし、その外国人と接する日本人は「日本代表」となり、互いに個々の言動が、即、その国の評価に結びついてしまう。「ヨンさま」はそのスマイルで、日本女性の「韓国感」を一挙に覆した。今、「多文化共生」「異文化理解」というような言葉が繁雑に取り上げられるが、それらの実現は社会的な課題であると同時に、個々の日本人の課題でもある。

(富田)

52号の3ページの「中国人の日本語学習者を支援する時の効果的な方法とは」の執筆者が「趙華 敏博士」となっていますが、「趙 華敏博士」が正しいです。お詫びして訂正します。

TNVN東京日本語ボランティアネットワークはボランティア日本語学習支援活動を行っている団体のネットワークです。TNVNの会員はそれぞれ地域での日本語学習支援活動を通し、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人などを、隣人として支援しています。TNVNは会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

東京日本語ボランティアネットワーク事務局の活動

日時：毎週金曜日

第1、第3、第5 金曜日 / 午後2時～4時
第2、第4 金曜日 / 午後2時～6時

場所

東京ボランティア・市民活動センター
JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線 - 出口B2b)飯田橋駅下車
セントラルプラザビル 10F ロビー

日本語ボランティア相談窓口

日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフが応えています。電話でご確認の上、気軽にお越し下さい。また、メールでのお問い合わせにもお応えています。ご意見もお待ちしています。

〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス No.4

TEL : 03-3235-1171

(呼出 : 金曜日活動時間帯のみ)

FAX : 03-3235-0050

E-mail : webadmin@tnvn.jp

URL : http://www.tnvn.jp/

郵便局払込

口座番号 : 00100-1-719259

加入者名 : 東京日本語ボランティア・ネットワーク

会員数 (2006年2月10日現在)

正会員 : 77団体 協力会員 : 51名

賛助会員 : 4団体

編集 / 岩佐 幹彦、大木 千冬

岡田 美奈子、小川 伶子、梶村 勝利

床呂 英一、西岡 暉純、林川 玲子

レイアウト / 鶴田 環恵